

ホフディラン企画『ワタナベイビー生誕50周年記念ライブ ～史上初！50歳のベイビー誕生～』 2018.10.17(水) 浅草公会堂

50歳ライブが決定しました。豪華ゲスト第一弾も発表。なんと千原ジュニアさん！みうらじゅんさん！絶対面白くなること間違いないなしだったのですが、さらに信じられない豪華ゲストが次々と発表になります。イベントを盛り上げるべく、まずは私の半生を知っていただこうと「ワタナベイビー新聞」なる号外を5月にゲリラ発行しました。今回はその第二号！13歳でギターに目覚め、曲作りに青春を費やした少年もそろそろ25歳。さあどうなる？どうなる？

25歳。ちょうど今までの人生半分。最大の転機が訪れる。人から人へと渡り歩いた自作のデモ・テープが本人の知らぬところで、一部ミュージシャン達を中心に大評判となり、とうとうプロの、しかも最先端のバンドTOKYO No.1 SOUL SETの前座を務めることとなる。

どうやら『ホフディラン』というバンドとしての出演という事で発表されているらしい。さあ大変だ。なにしろ、ホフディランというバンドが実存しない訳だから、まずはホフディランというバンドを作る事から始めなければならない。

デモ・テープを広めた（広めてしまった）大学の同級生シンゴ・スターがまずは連帯責任者としてベーシストに就任。彼の自宅で2人で練習を開始するものの、当然の事ながらいつまでたってもバンドらしくならない数週間を過ごす。

そうこうするうちに秋。10月17日で26歳となる。いよいよライブが直前に迫り、焦り出す。「誰でも構わないで、楽器の出来る知り合いをかき集めよう」という話になり、誰が来るかもわからないまま、初のスタジオ・リハーサルに入る。運命のリハーサル場所は、千歳烏山の『音夢帝国』という、古本屋の地下にあったオンボロスタジオ。

集まつたのはタケイ・グッドマン（映像作家）、佐波圭百オモロマン（漫画家）、かせきさいだ（ラップ・ミュージシャン）といった面々で、メンバーとして参加するために来たのか、「あのホフディランのリハーサルが始まるらしい」という噂を聞きつけて見物に来たのかは謎などろ。多分半々くらいか。ほぼ初対面に近いながらも心強い面々が集まってくれたのだが、とりあえず、この時点で「楽器の出来る知り合い」は来ておらず。

そして、最後に登場したのが、シンゴ・スターの従兄弟の小宮山雄飛であった。彼は当時まだ大学生。お互いに名前だけは聞いた事があったが、実際に会ったのはこの時が初めて。それまでに話に聞いて勝手に抱いていたイメージ（内気で引きこもり系の小柄なシンセサイザーオタク）とは全く逆の、180センチを超える現役の成城ボーイが現れたのだった。まるでサーフボードを持つように巨大なキーボードを生身で片手脇に抱えて、大声で「遅れません！」などと言いながらドカドカとスタジオに入ってきたこの時こそが、二人の全くの初対面の瞬間。まさか、これから的人生を共有し合うとはお互い思ってもいない初対面であった。ちなみに、小宮山の記憶によると、この日のワタナベイビーは喪服姿であったようである。

たぶん法事の帰りにそのままスタジオに行ったのかと思われる。

こうしてギター、ベース、キーボード、そしてコーラス＆ダンス3人、という奇妙な6人編成で、ホフディランの初リハーサルが始まる。リハーサルとは言っても、タケイ・グッドマン撮影のビデオにオモシロ映像を収める、といった趣旨のお遊びスタジオ・ライブで、自分たちが演者で自分たちが観客であった。ワタナベイビーが歌い、それぞれが演奏やコーラスを勝手に乗せていくという、とても真剣な練習とは呼べないようなスタイル。ところが「後に映像を見て笑えるように」という目的が功を奏し、どんどん面白いアレンジが生まれ、曲も仕上がってくる。

このリハーサル時のタケイ・グッドマン歌唱によるお遊びのメンバー紹介ブルース・セッションの中で、キーボードの小宮山雄飛が「テンフィンガー・ユウヒ」と命名され、そのまましばらくの間、芸名として名乗る事となる。ちなみにドラマーはおらず、質屋で買ったリズムボックス『TR-606』が、いわば7人目のメンバーであった。

運命の日。1994年11月8日。たった1～2回の練習で、いざ渋谷クラブ・クアトロライブ当日を迎える。この日がホフディランというバンドのステージ・デビューであると同時に、ワタナベイビー個人としても全くの人生初ステージであった。前述の通り、バンドを持った事すらないわけで、ライブハウスはおろか、学園祭などのステージ経験も一切なし。いきなり800人パンパンのクアトロ！ステージから見た超満員の客席の光景は非現実的すぎて、もはや緊張すらしなかった。プレッシャーも恐怖もなし。信じられないくらいにリラックスして演奏を楽しんだ。最高の気分だった！

人生初ライブ1曲目は、『ホフディランのバラッド』。この静かな曲から全てが始まつた。「1曲目からいきなりしょんぼりした曲で始まるライブがあつたら面白いのではないか」というコンセプトで数年前に書いた曲であったが、狙い通り、お客様は目の前で何が始まったのかもよくわからないような顔つきであった。ただ、曲に合わせて歌い踊るタケイ、オモロ、かせきのコーラス隊（ヒマラヤ・パンチ）による振り付けがだんだん笑いを誘い、徐々にソウルセットのお客さんが好意的な反応を示すようになる。1曲目を終えた時点での多数のお客さんが味方にについてくれているという手応えが感じられた。怖そうなヒップホップ系ファッショニの人たちが我々を見て、笑って応援

してくれている！当日の演奏曲目の正確なデータが残っていないのだが、『どうしてわかってくれないの』『フランクフルトの日が暮れちゃう』などを演奏したことは確か。途中で『プランデートーク』というコーナーを挟んでおり、テンフィンガー・ユウヒの洒落たジャズ・バー風アドリブ演奏に乗って、佐波圭百オモロマン（現在のシャシャミン＝イラストレーター）がデタラメでキザなトークをするのだが～「プランデーの香り沸き立つ午後の昼下がり、紳士淑女の皆様いかがお過ごしでしょうか…」～これがバカウケ。盛り上がったので少々引っ張りすぎ、舞台裏スタッフから巻きが入る。予定していた『文通しよう』をカットし、最後は、当時1番のキラー・チューン『マフラーをよろしく』でフィナーレ。意外なほどの大拍手に見送られ、ホフディランの最初のステージ、そしてワタナベイビー人生初ステージは終了した。

こうしてホフディランというバンドが産声をあげたわけであるが、この時点ではまだまだのお遊びバンド。この日のソウルセット前座のために結成して、役目を終えただけ。これ1回きりで終わっていくはずであった。今後、このバンドが継続していくなんて誰も思っておらず、まさか20年以上も名乗り続けるバンド名になるなんて、想像すらしていなかった。

よくわからなかつた。満員のクアトロで演奏するチャンスを手にすることの凄さも、まして初ステージを800人の観衆の前でプレイ出来ることがどれほど幸運なことだったのかも、当時は何もわかつていなかつた。実際、自力で成し遂げた事ではなかつた。ある日突然誰かに発見されて、突然ドキドキ、ワクワクできそうな世界に呼び込まれて、それに乗っかっただけの、いわばシンデレラ・ボーイ。バンドの結成すら、川辺ヒロシ氏に強引に結成させられたようなものだった。しかし、自分の曲をライブで演奏する、それが受け入れられる、という事実は、とてつもなく強烈な出来事であった。

2～3週間くらいは、初ライブの余韻に浸りながらボートと過ごす日々。あの日のクアトロライブがマスコミ関係者などの評判になつてはいるともつゆ知らず、普段の教科書販売員の生活に戻つていたが、このころになると、明大生協にも顔を出したり出さなかつたり。

そろそろライブから1ヶ月。12月になり、ようやくクアトロの興奮も落ち着いてきた矢先、ホフディランに2回目の仕事の依頼が舞い込んだ。スペー

スシャワーTVのクリスマス・イブ放送の生番組内でライブ演奏のオファー。たかだかステージを1回、しかも結成初ライブを経験しただけのバンドに対して、いかに破格のオファーあったのか、当時はもちろん理解できているはずもなく、「じゃ、やってみようか」なんて感じでホフディランが再び集結する。

同じころ、知り合いの知り合いのそのまた知り合いくらいの女性が、クアトロでのホフディランのデビュー・ステージを見てすごく感激していた、という話を聞く。「なに！褒めてたって？それならば、ライブの感想をお手紙に書いて送ってください！」と、伝えると、サガラミドリさん、という方から丁寧なお手紙が届く。

スペースシャワー出演のためのリハーサルに「ファンレターが来たぞ～！」なんて言いながら、書き下ろしの新曲『サガラミドリさん』を持っていく。今までのレパートリーは全部、学生時代のデモテープの曲の中からのチョイスだったため、新曲ができる、バンドとしての盛り上がりを感じる。『バンドの新曲！』という感覚がただただ嬉しかった。

ホフディラン2度目のライブはスペースシャワーTV『渋谷派パンチ』という生放送の音楽情報番組内の1コーナーであった。センター街ど真ん中のレコードショップ『渋谷WAVE』1階のサテライト・スタジオから放送していた番組で、ホフディランはインストア・ライブ形式で演奏を行った。演奏曲目は『ホフディランのバラッド』『サガラミドリさん』『マフラーをよろしく』の3曲。

1995年、年明けと同時に下北沢のクラブ『SLITZ』より月1でのレギュラー出演の誘いを受ける。それと同時に、バックコーラスをやってくれていたかせきさいだぁミメインのステージの際にバックアップバンドを受け持つことになる。いわゆるリバーシブル・バンド形式で、当時としてはかなり斬新なアイデアであった。このことにより、ホフディランとして『裏LB』、かせきバックバンドとして『LB祭り』の毎月2回、SLITZに出演することとなる。スチャダラパー、TOKYO No.1 SOUL SET、DASSEN3、ナオヒロック&スズキスムース、四街道ネイチャー、シャカゾンビなどと毎月共演。ホフディランとしては『スリットだよホフディラン』などなどの未発表曲や、のちにリリースされた多くの曲を含む新曲を毎月のように披露。『文通しよう』の間奏では、かせきさいだぁミがワタナベイビーの外国人恋人からのラブレターを朗読。また『夢の夢の夢の夢』は、いつしかかせきさいだぁミの正式レパートリーに。また、かせきさいだぁミワタナベイビー共作の『冬へと走りだそう』も、この頃に誕生する。

1995年、26歳の日常生活においては、大学も中退し、就職もせず、生協のアルバイトも行っているんだか行ってないんだかよくわからない、フラフラとギターばかり弾いている長男に、両親がついに我慢の限界を迎える。

説教に次ぐ説教の末、父親の取引先である大手商社『丸紅』の社員となる。天下の丸紅である。商社マンである。信じられない！と思う方も多いであろうが、本人も信じられない状態のままの入社で、実際商社マンなど務まるはずもなく、働きぶ

りも信じられないものであった。

父親の顔を立て頂いての入社で、新年度の4月入社ですらなく、95年の5月か6月ごろの中途採用。どこからどう見ても親のコネ丸出し、バカ息子の典型であったが、バリバリの商社マン、商社ウーマンの皆様に可愛がっていただき、楽しく過ごす。が、もちろん仕事はできない。できるわけがない。当時の大手商社というのは、エネルギッシュに外を飛び回る男性商社マン1人につき、それをデスクにてバックアップ・フォローする女性社員（マネージャーのような存在）1人という男女ペアで仕事が成立していたのだが、商社マン・ワタナベはバックアップ側の女性の見習い、お手伝い、という給料ドロボー的なポジション。ショッちゅう年下の新入社員の女性から怒鳴られていた。コピーするまともに出来ず（今もできない）、靴下の柄が左右違う、なんてことは日常茶飯事。実家のクルマで飯田橋の会社に行き、路上駐車で1日を終える、なんてこともざらにあった。

もちろん、丸紅側としては、ずっと女性社員のコピー取りの助手だけさせておくわけにも行かず、一人前の商社マンとして育成すべく、男性社員のお供をして取引先へ出向くこともあった。

ところが、ある重要な席で、無理をして（カッコつけて）お酒を飲んで、取引先の社長の目の前で嘔吐する事件が発生。ついにやらかした！大失態！…ところが、どう見てもヤクザにしか見えない製鋼所社長から「俺の前で吐く度胸のある奴は初めてだよ、ガハハハ」などと、まるでドラマかマンガのようなお言葉をいただき、それがきっかけで大きな仕事を1つモノにした実績あり。先輩営業マンから「慎くんが吐いてくれなかったら、あの仕事はなかったよ～、ありがとう」なんて言われる始末。本人的には苦い思い出だが、いい思い出。

この時期、毎月2回のスリット出演を続けながら、ホフディランには新たな動きが2つ。よりによってこんな時期に、芸能事務所及びレコード会社がホフディラン獲得のために動き始めたのだった。争奪戦、とまで言えるのかどうかはわからないが、2~3の事務所やレーベルやらとの接触はあったはず。まさか、このタイミングでメイン・ボーカルたる中心人物が今さら新人商社マンとなり、取引先社長の前で嘔吐しているなどとは想像もしていなかったことであろう。

そしてもう1つ、ワタナベイビーと小宮山雄飛の急接近である。

1995年6月のとある週、まるで空から降ってきたかのように曲が出来てくる。1週間で10曲、捨て曲なしである。少なくともこの時点では、過去最高の名曲オンパレードと言っても差し支えないであろう出来栄え。あまりにビックリして、慌てて録音し、原宿の小宮山家に10曲入りのデモ・テープを持って行ったことが、この急接近のはじまり。

そのテープは、一部関係者の間では『6月テープ』または『6月デモ』などと呼ばれ、語り草となる。本当に最近、その『6月デモ』が発見され、

本人も恐る恐る内容を確認。なんと『スマイル』と『遠距離恋愛は続く』と『電話をするよ』が1週間の間に出来ていたとは！本人も忘れていたこの事実。この1週間で20年食えた、と言っても過言ではないバブル・ウィーク。他には『こんな僕ですが』『約束するよ』『夢に出てきて』『ちょっぴり恋の予感』などなど。

この時点では、まだホフディランとはワタナベイビーのバンド、という認識であった。今から振り返っても、とてもリーダーシップを發揮していたとは思えないが、ワタナベイビーの曲を演奏するバンドであり、バンドの顔であった。返す返すも、リーダーだったかどうかは疑問が残るが、外部からはワタナベがリーダーだと思われていた。

ところが、当の本人は次のビートルズ・ファン。ジョン・レノンがポール・マッカートニーのバック・ボーカルを歌う、またはその逆の姿に魅力を感じていた。リーダーのいないバンドが理想だった。その時点で小宮山にオリジナル曲はなかったし、ボーカルも未知数であったが、なんとなく、「キミも曲を作って歌ったらいいのに…」などとそそのかし始める。この頃から、新しく出来た曲はまず小宮山の自宅に持って行って聴かせ、アレンジを仕上げてからホフディランのバンド・リハーサルに持っていく、という順序になっていく。もともと他のメンバーにはみんな本業があったわけだから、成るべくしてなった形ではあるが、このあたりからホフディランは徐々に2人になっていく。

それまでももちろん多芸、多才なメンバーに助けられ、とてつもなく面白かったホフディランではあったが、音楽的な面で対等にやり取りのできるメンバーが必要になってきていた。当時の小宮山は、1人だけ大幅に年下で、ショーアップというよりは演奏を支える側のメンバーであったが、徐々に「楽器のできるメンバー」同士の友情が育まれて行ったのであった。

当時から、圧倒的にクルマ移動の方が好きであったが、首都高速だけは苦手だった。そもそも、そんなに慌ててどこかへ行った事もなく、遅刻してもノンビリと一般道を走る主義であったワタナベが初めて急いでいた。急いで会いに行きたい相手に巡り会った。小宮山と音楽を作るためには、苦手だった首都高速にも乗るようになる。生まれて初めて「時間がもったいない」という感覚を覚える。汐入～高樹町。当時は目をつぶっても走れるほど通いつめた。

そして、小宮山もワタナベを待った。「時間がもったいない！」「音楽を追求したい！」と言いながら、何時間も遅刻してくるワタナベをひたすらに待った。大学4年の貴重な土日を全てホフディランのために、ワタナベイビーと音楽制作をするために空けて待っていたのだった。

まるで恋愛であった。まるで青春であった。こうして、ワタナベイビーと小宮山雄飛の『ホフディラン』が始まっていく。

つづきはつづく

ホフディラン企画『ワタナベイビー生誕50周年記念ライブ～史上初！50歳のベイビー誕生～』

開催日 2018年10月17日(水)

日 時 Open 18:00 / Start 18:30

場 所 浅草公会堂

出 演 ホフディラン Guest:千原ジュニア / みうらじゅん

チケット VIP席:¥8,000 / 全席指定:¥5,000 *3歳以上チケット必要

チケット先行予約はこちら！

<http://eplus.jp/hoff-1017hp/>

受付期間：7/3(火)21:00-7/10(火)23:59

バースデーライブ詳細やホフディランの

新着情報はhoff.jpをチェック！

